

平成18年度第2回対馬暖流系アジ・サバ・イワシ長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合センター
西海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2007年4月～9月)

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域の位置は、「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」で経過する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、「平年並み～やや高め」で経過する。

漁況(来遊量水準)

- (1) マアジは前年並み。
- (2) マサバは前年を上回る。
- (3) ゴマサバは前年並み。
- (4) マイワシは極めて少ない。
- (5) ウルメイワシは前年並み。
- (6) カタクチイワシは前年を上回る。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班 担当：青木、田中、佐藤

〒100-8950 東京都千代田区霞が関1-2-1

電話：03-3502-8111(内線7375)、直通電話：03-3501-5098、ファックス：03-3592-0759

電子メール：yuusuke_satoh@nm.maff.go.jp

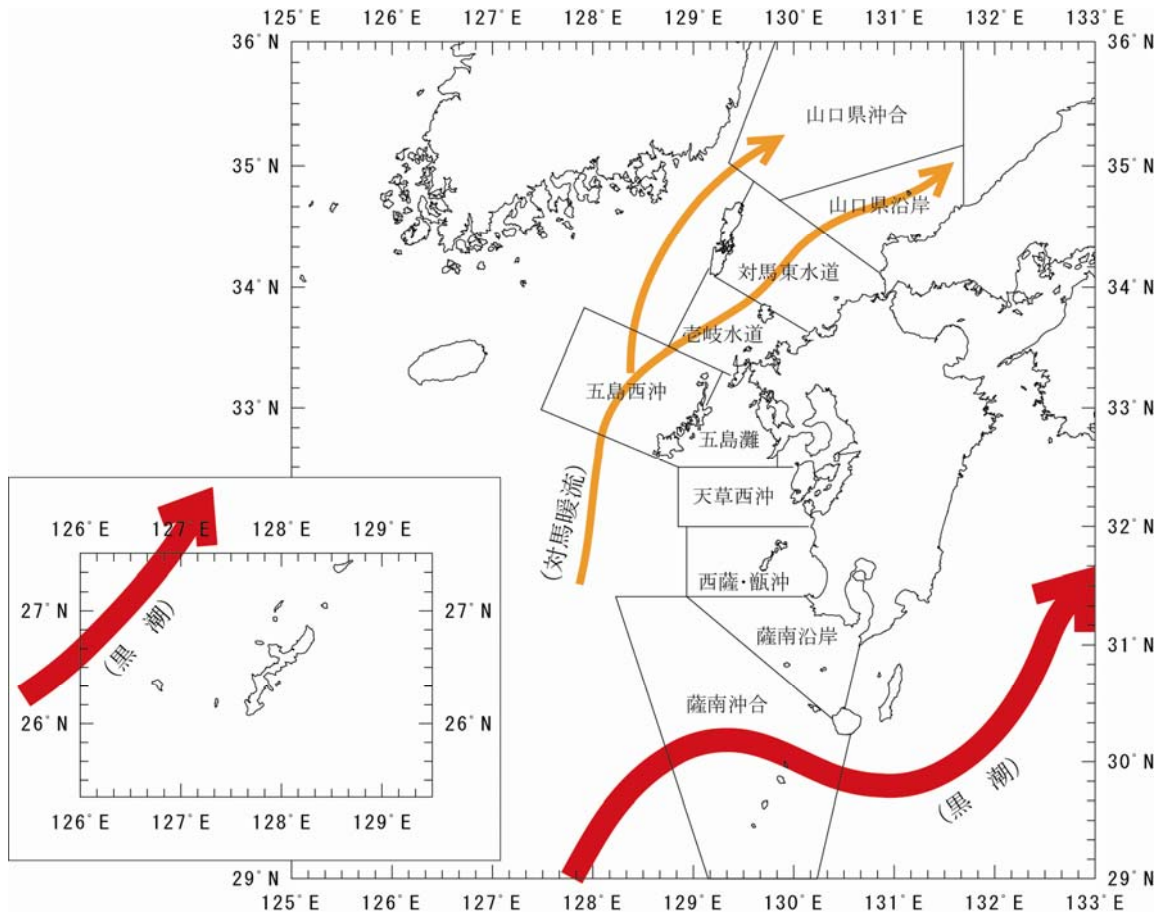
独立行政法人水産総合研究センター 西海区水産研究所 業務推進部

〒851-2213 住所 長崎市多以良町1551-8

電話：095-860-1600、ファックス：095-850-7767、電子メール：snf-suisin@ml.affrc.go.jp

なお、本予報は水産庁のホームページ(<http://www.jfa.maff.go.jp/release/index.html>)、水産総合研究センターにおける我が国水域資源調査推進委託事業のホームページ(<http://abchan.job.affrc.go.jp/>)、及び西海区水産研究所のホームページ(<http://www.snf.affrc.go.jp/>)に掲載されます。

予報対象海域



参画機関

山口県水産研究センター	沖縄県水産海洋研究センター
福岡県水産海洋技術センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
佐賀県玄海水産振興センター	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
長崎県総合水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター
熊本県水産研究センター	西海区水産研究所
鹿児島県水産技術開発センター	

平成18年度第2回東シナ海長期海況予報

1. 今後の見通し(2007年4月～2007年9月)

(1)海流

薩南海域における黒潮北縁域の位置は、「屋久島南付近での変動」で経過する。

(2)表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甌沖、薩南沿岸、黒潮域、沖縄島周辺海域、大陸棚上では、前半、後半ともに「平年並み～やや高め」で経過する。

2. 経過(2006年10月～2007年3月)

1. 大陸棚上

(1)海面水温

北部:10月「かなり高め」、11月「はなはだ高め」、12月「かなり高め」、1月「やや高め」、2月「かなり高め」。

南部:10月「やや高め」、11・12月「かなり高め」、1月「やや高め」、2月「かなり高め」。

2. 黒潮流域

(1)海流

沖縄北西方の黒潮の流路は、秋季、冬季ともに「平年並み」。流量は、秋季、冬季ともに「平年並み」で経過。

薩南海域における黒潮北縁域は、12・1月は「接岸傾向」、他の月は「屋久島南付近での変動」で経過。

(2)海面水温

10月「やや高め」、11・12月「かなり高め」、1月「平年並み」、2月「かなり高め」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1)表層水温

山口県沖合:10月「やや低め」、11・1・3月「やや高め」。

山口県沿岸:10月「平年並み」、11月「かなり高め」、1・3月「やや高め」。

対馬東水道:10月「やや低め」、11・12月「平年並み」、1・2月「やや高め」、3月「かなり高め」。

壱岐水道:11月「かなり高め」、2月「やや高め」、3月「かなり高め」。

五島西沖、五島灘:11月「かなり高め」、2・3月「やや高め」。

天草西沖、西薩・甌沖:11・3月「平年並み」。

薩南沿岸:11月「平年並み」、3月「かなり高め」。

薩南沖合:11月「平年並み」、3月「やや高め」。

沖縄島南東:10月「やや高め」、11月「かなり高め」。

(2)表層塩分

山口県沖合:10・11月「かなり低め」、1月「平年並み」。

山口県沿岸:10月「平年並み」、11月「かなり低め」、1月「平年並み」。

対馬東水道:10月「やや低め」、11・12月「平年並み」、1・2・3月「やや低め」。

壱岐水道:11月「やや低め」、2・3月「平年並み」。

五島西沖、五島灘:11・2・3月「平年並み」。

天草西沖、西薩・甌沖:11・3月「やや低め」。

薩南沿岸:11月「やや低め」、3月「平年並み」。

薩南沖合:11月「かなり低め」、3月「平年並み」。

3. 現況(2007年3月上旬)

(1)大陸棚上

海面水温は北部は「はなはだ高め」、南部は「かなり高め」。

(2)黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「接岸」。海面水温は「かなり高め」。

(3)対馬暖流域

海面水温は「はなはだ高め」。

(註) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の出現確率

「かなり」 : 約7年に1回程度の出現確率

「やや」 : 約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」 : 約2年に1回程度の出現確率

東シナ海～日本海西南域あじ・さば・いわし長期漁況予報

今後の見通し(2007年4月～2007年9月)

対象海域:東シナ海～日本海西南海域

対象漁業:まき網、定置網、その他

対象魚群:0歳魚(2007年級群(2007年生まれ))、1歳魚(2006年級群)、2歳魚(2005年級群)。

魚の大きさは、あじ・さばは尾叉長、いわしは被鱗体長で表示。

1. マアジ

(1)来遊量:前年並み。

(2)漁期・漁場:沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域の漁況は前年を上回り、平年並み。

(3)魚体:15～25cmの1歳魚(ゼンゴ・小銘柄)が主に、5～15cmの0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)と25cm以上の2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。

2. マサバ

(1)来遊量:前年を上回る。

(2)漁期・漁場:沖合域の漁況は前年を上回り、沿岸域の漁況は前年・平年を上回る。

(3)魚体:27～32cmの1歳魚(豆・小銘柄)が主に、15～25cmの0歳魚(豆銘柄)も漁獲される。

3. ゴマサバ

(1)来遊量:前年並み。

(2)漁期・漁場:沖合域の漁況は前年を上回り、沿岸域の漁況は前年並みで、平年を上回る。

(3)魚体:30～37cmの1～3歳魚(小・中銘柄)が主に、15～28cmの0歳魚(豆銘柄)も漁獲される。

4. マイワシ

(1)来遊量:極めて少ない。

(2)漁期・漁場:まとまった漁場は形成されず、散発的に沿岸域で漁獲される。

(3)魚体:15～21cmの0～2歳魚(中・大羽銘柄)が主に漁獲される。

5. ウルメイワシ

(1)来遊量:前年・平年並み。

(2)漁期・漁場:漁期後半を主体に、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3)魚体:漁期前半は18cm以上の1・2歳魚(大羽銘柄)が、漁期後半は5～15cmの0歳魚(小・中羽銘柄)が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

(1)来遊量:前年・平年を上回る。

(2)漁期・漁場:主に5～7月に沿岸域に漁場ができる。

(3)魚体:4月は10cm程度の1歳魚(大羽銘柄)に3～6cmの0歳魚(シラス・カエリ銘柄)が混じり、5月以降は5～10cmの0歳魚(カエリ～中羽銘柄)が主に漁獲される。

注:「前年」は2006年4月～2006年9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。「沖合域」は大中小型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過(2006年10月～2007年1月)および今後の見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980～1990年代前半に増加し、1993～1998年には近年では高い水準を維持した。1998～2000年の加入量減少のため資源は減少傾向を示したが、2001～2004年の加入量は1994～1997年の水準に回復し、2002～2004年には資源量も増加傾向を示した。しかし、2005年の加入量水準は高くなかったとみられ、2005年の全体の資源量はやや減少した。東シナ海・日本海(青森県～鹿児島県)での我が国のマアジ漁獲量は、1973～1976年に9～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980～1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを維持したが、1999～2002年は13～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであったが、2005年は14万トンに減少した。

(2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970・80年代には比較的安定していたが、1992～1996年に増加傾向を示した後、1997年に急減し、1999～2005年は低い水準にある。東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバ漁獲量は、1970年代後半には27～30万トンであったが、その後減少し、1990～1992年には13～15万トンと大きく落ち込んだ。1993年以降、漁獲量は増加傾向を示し、1996年には41万トンに達したが、1997年は21万トンに大きく減少し、2004年は83千トン、2005年は87千トンと低い水準にある。

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に分布するゴマサバの資源量は、1992～2004年に比較的安定して同程度の水準を保っていたが、2005年に増加した。東シナ海・日本海における我が国のゴマサバ漁獲量は、年変動はあるものの、1980年代以降およそ5万トン前後で推移している。1999年に近年で最高の88千トンが漁獲された後、再び5万トン前後の漁獲が続いたが、2004年には31千トン、2005年には70千トンと、近年は変動がやや大きい。

(4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海においてマイワシは、1980年代後半から1990年代前半にかけて多く漁獲されたが、その後急激に減少した。2001～2003年に漁獲量は1千トン程度で推移した。1999年には0歳魚がやや多く漁獲され、資源状態は低位ながらも一時上向いたが、その後は減少し、近年は極めて低位にある。海域によっては水揚げ量が前年を上回ることもあるが、全体として資源は低水準である。

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

1990年代以降では、2000年まで資源は漸減傾向にあったが、2001～2002年の加入量が以前よりも多かったため、一時的に資源は上向いた。2003年以降は再び漸減傾向で推移しているとみられる。2006年の春季に鹿児島県においてやや多くの水揚げがみられたが、1・2歳魚(2005・2004年級群)であった。2006年級群は2005年級群と同程度の豊度と考えられる。

(6) カタクチイワシ対馬暖流系群

1990年代以降では、1995～1996年および1998～2000年にかけて資源は高水準で推移した。2001年の夏季までは沿岸域を中心に好漁が続いていたものの、2001年秋季から2003年春季までは加入量が少ない状態が続いていた。

2003年秋季以降はやや好漁となっている海域が増えている。2005年および2006年とも1月以降に大羽イワシを主体に漁況が上向き、両年とも春季発生群の加入はやや良かった。2007年1月には大羽イワシの水揚げが過去最高となっている。

2. 漁況の経過

2006年10月～2007年1月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖および東シナ海中部が中心であった。この間の、大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計8万0千トンで前年(2005年10月～2006年1月、8万2千トン)並みであった。マアジは5千トンと前年(9千トン)を下回り、さば類は6万5千トンで前年(6万0千トン)並みであった。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1のような経過であった。マアジの漁獲量は、海域により差があるものの、前年並み～上回る漁獲があり、全体としては前年を上回り、平年並みであった。漁獲の主体は、15cm以下の0歳魚(2006年級群、今後の見通しでは1歳魚、以下同様)と15～20cmの1歳魚であった。マサバは、前年・平年を上回った。漁獲の主体は25～28cmの0歳魚であった。ゴマサバは、前年並みで、平年を上回った。漁獲の主体は体長28～35cmの0～2歳魚であった。マイワシは、福岡県で前年を上回ったが、全体としては低調に推移した。漁獲の主体は18～20cmの1・2歳魚であった。ウルメイワシは、不漁であった前年を上回ったが、平年並みであった。漁獲の主体は18～25cmの1・2歳魚であった。カタクチイワシは、山口県と長崎県で前年・平年を大きく上回り、全体としても前年・平年を大きく上回った。漁獲の主体は10cm以上の1歳魚であった。

3. 今後の見通しの説明

(1) マアジ

例年、4～9月期には1歳魚(ゼンゴ・小銘柄)が漁獲の主体で、0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。2005年級群の豊度は2004年級群より低く、2006年級群は2005年級群より豊度がやや高いと考えられる。2007年級群について、親魚量の水準は比較的高く、今後の海況によって加入量が大きく変化する可能性も高いが、2006年と同程度の加入量と見積もるのが妥当であろう。これらから、0歳魚(2007年級群)は前年(の0歳魚、以下同様)と同程度、1歳魚(2006年級群)は前年よりやや多く、2歳魚(2005年級群)は前年より少ないと見積もられる。これらから、全体の来遊量も前年並みと考えられる。

沖合域の漁況の指標となる大中型まき網のCPUE(1日当り漁獲量)は、近年、比較的高い値で安定していたが、前年は減少した(参考図参照)。沿岸域の漁況の指標となる代表的な沿岸漁業の漁獲量は、近年、比較的高い水準で安定している。沖合の漁況は、来遊量が前年並みであることを反映して、前年並みで、沿岸域の漁況は、前年を上回り、平年並みと考えられる。

(2) マサバ

例年、4～9月期には1歳魚(豆・小銘柄)が漁獲の主体で、0歳魚(豆銘柄の一部)も漁獲される。2005年級群の豊度は2004年級群より低く、2006年級群の豊度は2005年級群より高いと考えられる。2007年級群の豊度を予測するのは困難であるが、親魚量の水準は横ばい傾向で、初期生残の良否に関わる環境要因の指標と見られる水温(東シナ海南部、2月)が、2007年は2006年よりやや高いので(水温が低いと初期生残に有利)、2006年級群と同程度かやや少ない

と見積もるのが妥当であろう。これらから、0歳魚(2007年級群)は前年並みかそれより少なく、1歳魚(2006年級群)は前年を上回り、2歳魚(2005年級群)は前年より少ないと見積もられる。主に漁獲される1歳魚が前年を上回ることから、全体の来遊量も前年を上回ると考えられる。

来遊量が前年を上回ることを反映して、沖合域の漁況は前年を上回り、沿岸域では前年・平年を上回ると考えられる。

(3) ゴマサバ

例年、4～9月期には1歳魚(豆・小銘柄)が漁獲の主体で、0歳魚(豆銘柄の一部)も漁獲される。2005年級群の豊度は2004年級群より低く、2006年級群は2005年級群と同程度の豊度と考えられる。2007年級群の豊度を予測するのは困難であるが、初期生残の良否に関わる環境要因の指標と見られる水温(東シナ海南部、2月)が、2007年は2006年と同程度なので(水温が低いと初期生残に不利)、2006年級群と同程度と見積もるのが妥当であろう。これらから、0歳魚(2007年級群)は前年並み、1歳魚(2006年級群)は前年並み、2歳魚(2005年級群)は前年より少ないと見積もられる。主に漁獲される1歳魚が前年並みであることから、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

近年、沖合域、沿岸域(鹿児島県)の指標はかなり変動している。沖合域の漁況は、低調であった前年を上回ると考えられる。沿岸域の漁況は、4～6月は、1～3月と同一群が漁獲対象となるので、1～3歳魚主体に好調だった前年並みで、平年を上回り、7～9月は、1～3歳魚主体に0歳魚が加入し、前年並みで、平年を上回ると考えられる。期間全体としては、好調だった前年並みで、平年を上回ると考えられる。

(4) マイワシ

2001年に対馬暖流域における産卵調査の結果が過去最低となり、この頃の沿岸域におけるマイワシの水揚量は極端に低かった。ただし、2002年に沿岸域での水揚量は底打ちとなり、その後は前年を上回る水揚量で推移してきたが、2000年以前に比べると依然として極めて低水準である。今後は0歳魚の加入量によって来遊水準が決まると考えられるが、2007年級群も産卵親魚量が少ないので期待できない。

(5) ウルメイワシ

2001～2002年に0歳魚の加入がやや良く、来遊水準は一時上向いたものの、その後は漸減傾向が続いている。2006年夏季に行った計量魚群探知機調査では前年を下回り、来遊水準の漸減傾向を裏付けた。ただし、鹿児島県では春季にウルメイワシの来遊水準が高かったため、2006年4～8月における水揚量は前年を大きく上回った。2006年11月以降の水揚量は前年並みであり、2007年級群は2006年級群と同程度の加入が見込まれる。

(6) カタクチイワシ

2005・2006年の1～3月に大羽イワシの来遊が多く、そのため両年の春期発生群の加入はやや良かった。ただし、2006年夏季に行った計量魚群探知機調査では、前年を大きく下回っている。また、4～8月の来遊水準は、11月以降の来遊水準と正の相関を持つこと、および五島灘の2月下旬の水温偏差と4月以降の来遊水準が負の相関を持つ。1月に大羽イワシが九州西岸に多く来遊しており、1992年以降ではもっとも多い水揚げを示した。このため、4月以降の加入が期待される。

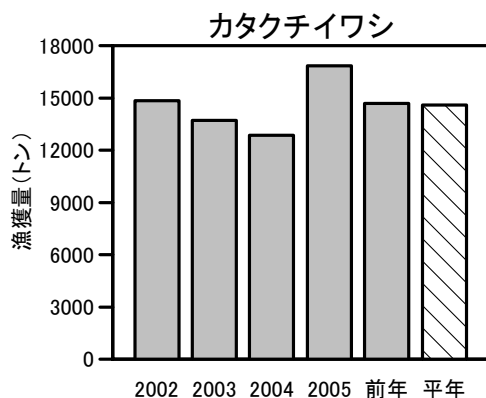
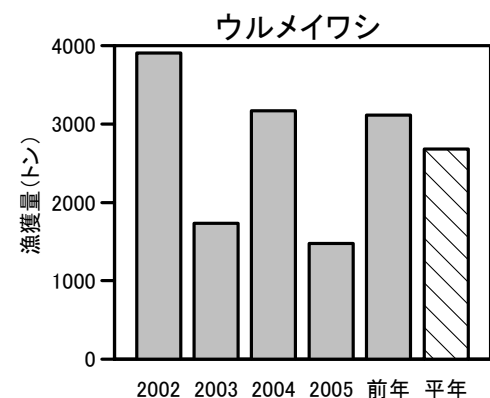
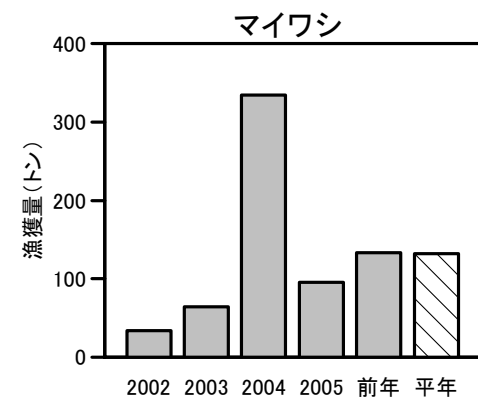
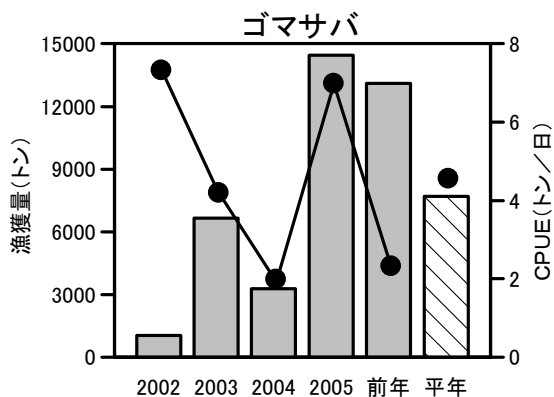
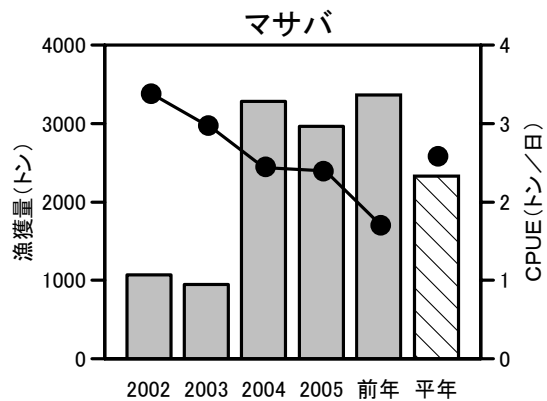
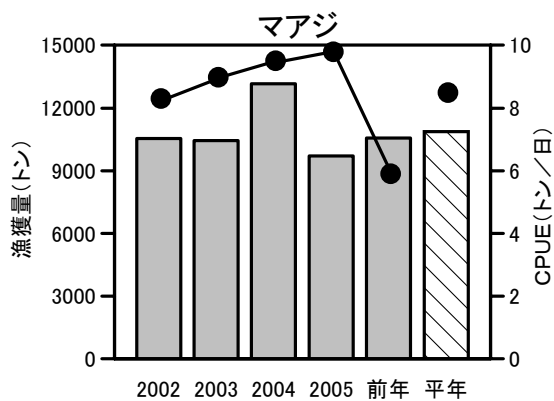
表 1. 沿岸域の漁況経過(2006 年 11 月～2007 年 1 月、一部 2006 年 10 月、2007 年 2 月を含む)

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	中型まき網で 1,002 トンの水揚げがあった。これは前年比 250%、平年比 176%で前年・平年を上回った。湊支店の棒受網では、ゼンゴが 10～12 月にかけて 1.48 トン水揚げされ、前年比 239%、平年比 39%であった。	中型まき網で 978 トンの水揚げがあり、前年比 167%、平年比 206%で前年・平年を上回った。湊支店の棒受網では、21 トンが水揚げされ、前年比 342%、平年比 122%であった。	
福岡	代表港まき網漁獲量は 197 トンで前年比 83%、平年比 54%と不漁。マメ銘柄が中心。棒受網は 110 トンで前年比 80%、平年比 101%と平年並み。銘柄は小が主体であった。	代表港まき網の漁獲量は 280 トン、前年比 102%、平年の 68%とやや不漁。銘柄ではギリが 97%。棒受網での漁獲量は 7.4 トン。まき網同様ギリ銘柄の漁獲が多かった。	代表港まき網の漁獲量は 46 トンで、前年比 17%、平年比 43%と不漁であった。
佐賀	前年並みで、平年を下回った。(前年比 87.6%、平年比 74.6%)	前年・平年を大きく上回った。(前年比 10608%、平年比 796%)	
長崎	地域により差があるが、概ね前年・平年を上回った。(前年比 136%、平年比 121%)	地域により差があるが、概ね前年・平年並みであった。(前年比 98%、平年比 105%)	
熊本 牛深港	水揚量は 356.1 トンで前年比 424.0%、平年比 245.0%であった。沿岸における棒受網漁業では不調であった。	水揚量は 1,812.9 トンで前年比 414.1%、平年比 636.4%であった。沿岸における棒受網漁業では不調であった。	
鹿児島	期間中、豆アジ(2006 年級群)及び小・中アジ(2005 年級群・2004 年級群)主体であった。マアジ豆(2006 年級群)は北薩海域では 12 月以降、薩南海域では 1 月以降に漁況が好転した。期間中合計で 1,488 トンの水揚げで、前年・平年を上回った。(前年 140%、平年 122%)		期間中、薩南海域が主漁場となり、ゴマサバ中小・中(2006 年級群・2005 年級群・2004 年級群)主体であった。また北薩海域では、12 月まではゴマサバ小・中(2006 年級群)主体であったが、1 月以降にマサバ豆・小主体(2006 年級群)にゴマサバ混じりに推移した。薩南海域においても、例年に比べマサバの混獲が多かった。期間中合計で 8,570 トンの水揚げで、前年並みで平年を大きく上回った。(前年 108%、平年 259%)

表 1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	中型まき網での水揚げはなかった。湊支店では 10 月に棒受網でヒラゴを主体に 63 トン水揚げされた。水揚量は、前年比 177%、平年比 317%と、前年・平年を上回った。	湊支店の棒受網は 10 月に大羽のみ 448 トンを水揚げしていた。水揚量は前年比 118%、平年比 123%であった。	湊支店は棒受網中心に 443 トンを水揚げし、前年比 240%、平年比 166%であった。銘柄組成は大が 5 トン(1%)、中小羽が 90 トン(20%)、カエリが 204 トン(46%)、シラスが 144 トン(32%)であった。シラスの水揚量は昨年とほぼ同じだが、今期は 10 月のカエリ水揚量が顕著であった。カエリは前期に続き秋漁も好調だったことから、昨年 1 年間の水揚量が 1,200 トンに達し、42 年の統計史上最高を記録した。
福岡	代表港まき網の漁獲量は 0.9 トンで、前年比 115%、平年比 340%であった。棒受網では 0.1 トンであった。小型定置網では 3.1 トンで、平年比 312%であった。	代表港まき網の漁獲量は 6 トンで、前年比 23%、平年比 74%とやや不漁であった。一方、棒受網では全く漁獲されなかった。	棒受網の漁獲量は 1.4 トンで、前年比 66%、平年比 15%と著しく不漁であった。
佐賀	ほとんど水揚げなし。(前年比 13.1%、平年比 36.7%)	水揚げなし。	前年・平年を下回った。(前年比 68.2%、平年比 63.9%)
長崎	前年同様、漁獲は低調に推移した。	地域により差があるが、概ね前年・平年を下回った。(前年比 74%、平年比 41%)	各地区とも前年・平年を上回った。(前年比 202%、平年比 372%)
熊本 牛深港	水揚量は 0.6 トンで前年比 28.9%、平年比 27.9%であった。	水揚量は 401.7 トンで前年比 130.3%、平年比 60.7%であった。沿岸における棒受網漁業は好調であった。	水揚量は 939.7 トンで前年比 48.8%、平年比 137.9%であった。沿岸における棒受網漁業では好調であった。
鹿児島	県 4 港のまき網で 2.5 トンの水揚げで、前年比 80%、平年比 330%となった。	県 4 港のまき網では 334.0 トンの水揚げで、前年比 283%、平年比 153%、北薩海域の棒受網では 26.8 トンの水揚げで、前年比 320%、平年比 85%だった。	県 4 港のまき網では 552.7 トンの水揚げで、前年比 183%、平年比 252%、北薩海域の棒受網では 240.1 トンの水揚げで、前年比 106%、平年比 326%だった。1 月以降、北薩海域で大羽カタクチ主体の水揚げが好調に推移している。 【シラス】西薩海域では、128.9 トンの水揚げで前年比 20%、平年比 38%、志布志海域では 76.2 トンで前年比 62%、平年比 59%だった。(H19.1 月末現在)

注:「前年」は 2005 年 11 月～2006 年 1 月、「平年」は過去 5 年の平均値。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量(沿岸漁況の指標の一つ;棒グラフ)と大中型まき網の1日当たりの漁獲量(沖合漁況の指標の一つ;折れ線グラフ、CPUE)。沿岸漁業の漁獲量は、マサバは山口県～熊本県(ゴマサバを含むが主にマサバ)、ゴマサバは鹿児島県(マサバを含むが主にゴマサバ)、その他は山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。4月～9月。平年は過去5年平均。